

藻場調査速報

海藻と言えば、昆布、わかめ、ひじき、もずくなど食卓でもお馴染みですが、海の中には多くの「食べられない海藻」が生えています。一般の人達には「食べられない海藻」＝「役に立たない海藻」と思われがちで、私がそういった海藻の研究をしていると言うと「何の役に立つの？」と皆不思議な顔をします。森林が1年で何 ha 砂漠化していると聞けば、「大変だ」「何とかしなくては」と思いますが、海中の森がなくなったと聞いてもどうもピンとこないようです。

しかし、「食べられない海藻」であっても大変重要な役割があります。海藻の群落を「藻場」といいますが、藻場は外敵が侵入しにくく、潮の流れを弱め穏やかな環境を作り出す為、魚介類の格好の産卵場となり、稚仔魚の隠れ家となります。

また、そこに生活するエビやカニなどの小動物はそれを食べる小魚の餌となり、海藻自体もアワビやウニ、アイゴ等の植食動物の餌となります。更に海藻は海中の有機物を取り込んで生長するので、海水の富栄養化を防ぐ役割も果たしています。

このように大変重要な藻場ですが、近年藻場が消失する「磯焼け」が全国各地で広がっており、鹿児島県も例外ではありません。つるりとした岩が転がって魚影も少なく、なんとも殺風景な景色が広がっています。

しかし、県内の全てが磯焼けしているわけではなく、ちゃんと藻場が残っているところもあります。その環境や海藻の種類、海域特性等を調べる事は、藻場造成を行う上で大変重要なヒントになるはずです。

ところが、県内の何処に何の藻場があるかと聞かれても、全体の状況は誰も把握できて

いないのが現状です。

そこで今年、春から夏にかけて、鹿児島大学水産学部と協力して県内全域の藻場調査を実施しました。まだ、補足調査が必要な部分もあるので正式な結果報告はできませんが、私が担当した地域の概況を紹介します。

南薩（枕崎～知覧）

沿岸の転石帯では磯焼けが深刻で、ウニが非常に多いのが気になりました。陸から少し離れた瀬や一部の岩礁地帯には、背の低いフタエモクのガラモ場がパッチ状に形成されていました。

大隅西（垂水～根占）

全体的に藻場は少ない状況ですが、主に鹿屋市沿岸の転石帯や沖堤でヒジキ、イソモク、マメタワラ、ヤツマタモクなどのガラモ場が点在していました。

大隅東（志布志～内之浦）

志布志湾の岩礁帯は、南方系ガラモを主体とした多様な海藻群落が確認できました。高山～内之浦の転石帯は磯焼けが深刻で、肝属川河口周辺の海水の濁りが気になりました。内之浦の一部の岩礁地帯で背の低いガラモ場がパッチ状に形成されていました。

大隅南（佐多）

外洋に面した海域では水深の浅い岩上にフタエモクのガラモ場が形成されていました。

総合的には、僅かですが回復傾向にあるようです。藻場造成はなかなかこれという決定打がなく難しい事業です。今年着任したばかりの未熟な自分に何ができるかわかりませんが、自然が少しでも「回復しよう」としているこの期を生かし、海の森の復活を目指してがんばりたいと思います。（生物部 井手）